

武満徹の創作における転換期の作品としての《フォー・アウェイ》

——響きの構成方法と作曲背景から——

原 塁

本論文は、武満徹が（1930～1996）が1973年に作曲したピアノ独奏曲である《フォー・アウェイ》を考察の対象とした。ティモシー・クーツィンは1988年の論文において、ピッチクラス・セット理論を用いることで、同曲の構造上の一貫性を見出そうと試みた。そのなかで彼は、(01)と(06)というふたつの音程が、作品全体に構造的な一貫性をもたらす点でとりわけ重要であることを強調している。本論文の第1節では、同曲で用いられる和音に関して三和音的な読みを行なう必要性を強調し、より古い時代の和声の語彙に立脚した代替的な分析の方針を提示した。続く節では、同曲の響きの構成方法に焦点を当て、ふたつのケースを考える必要性を示した。すなわち、(01)と(06)というふたつの音程そのものが前景化する場合と、これらが三和音的な響きの派生形の一部と考えられる場合である。第3節では、《フォー・アウェイ》が作曲された当時の時代状況と、武満がバリ島旅行について記したエッセイを検討した。武満は、《フォー・アウェイ》を作曲する直前にバリ島を訪れており、そこで聴いたバリ島の伝統音楽であるガムランから大きな影響を受けた。武満はガムランに、音階に基づく即興演奏の美しさを見出した。また、彼は、「自己」と「他者」との関係の上に立ち現れる音楽の在り方に感銘を受けた。武満は、この経験を通して、「音階」と「関係」とのあいだに概念上の相同性を見出した。《フォー・アウェイ》において武満はオクタトニック・スケールを用いることで異なる文化のあいだの相互関係を音楽的に表現していると考えられ、それゆえ、この音階は、同曲において特権的な位置にあることを示した。以上によって、武満の創作観と実作品との繋がりが明らかになった。